

### ●神話伝説

**桜姫** 天照大神の天孫、天津日高日子番能邇邇藝能命(アマツヒタカヒコハノニニギノミコト)の太后として木花之佐久夜毘賣(コノハナノサクヤヒメ)という方がありました。富士山浅間神社の祭神は、この神様です。この神様の名のサクヤは、実はサクラだという説が有力です。古代の発音のラ行がヤ行に音韻変化してしまった(そういう音韻変化法則があることが国語学者によって明らかにされています)のであって、もともとはコノハナノサクラヒメだったというのです。「櫻の語の古史に見えたるは之をはじめとす」と山田孝雄『櫻史』はのべています。

**衣通姫** 応神天皇の御孫にとっても美しい女性がいて、その美しさが衣を通して照り出でるとして、「衣通郎女」(そとおりのいらつめ)と呼ばれました。これが和歌三神の一人として崇められた衣通姫です。その美しさは、

「花ぐはし桜の愛でこと  
愛では早くは愛でずわが  
愛づる子等」  
と、桜の花の麗しさに譬え  
られました。いま、衣通姫  
と名づけられた枝垂桜の  
品種がありますが、それ  
はこの故事にもとづいたも  
のです。



東京小金井公園の衣通姫

**乳母桜** 岐阜県不破郡にある乳母桜は、足利義視が応仁の乱のときこの地に隠れて土地の娘を愛し一子をもうけたが、乳母が誤ってその子を井戸に落としたので、乳母を斬って井戸に投じ、井戸を埋めて桜を植えたものだと言い伝えられています。毎年血のような花が咲くので血染めの桜ともいいます。

### ●語源

サクラという語の語源は、本居宣長によると、上に見たコノハナノサクヤヒメに由来し、「万の木の花の中に、桜ぞ勝れて美き故に、殊に開光映(さきはや)てふ名を負て、佐久良とは云り」ということだといえます(『古事記伝』)。

ほかにもいろいろな説があります。

本草学の貝原益軒は、サクラの語源は「さくる也。其木皮自ら立ながらよここにさくる物也」(『日本釈名』)といっています。また、国文学の芳賀矢一は、『国民性十論』で「サケの語源は Sake で恐くはサクラ Sakura と同語根の語であらう」として、「桜の花のバツと咲きみだれたうつくしさ

は、繁昌、栄華、富貴等一切を聯想する」と書いています。さらに、歴史学の和歌森太郎は、サクラのサはサナエのサのように稲田の神霊を指し、クラはイワクラ(磐座)のクラと同じで、神霊の依り鎮まる座を意味するとして、「こうした、サとクラとの原義から思うと、桜は……もともとは神霊の依る花とされたのかもしれない」とのべています(『花と日本人』)。

今日では、この和歌森太郎説が広く受け容れられているようです。

## ●信仰

サクラは、古来、和歌森太郎がというような神霊の依る花であるとともに、山の霊の依代、仏法の奇跡を生んだ聖なる木など、宗教的な崇敬の対象となってきました。

たとえば、兵庫県養父郡大屋町の「樽見の大桜」は、地域の人々から山全体の霊が宿る「山霊の依代」として昔から崇められてきた大樹です。

また、山梨県北巨摩郡武川村の「山高神代桜」は、倭健命お手植えの桜と言い伝えられている大樹ですが、樹勢が衰えていたのが日蓮上人の祈願により回復したということで奇跡の「如法桜」といわれています。この樹は同時に、豊作をもたらす農呪的な意味もになっています。



樽見の大桜

## ●故事行事

**櫻會(さくらえ)** 桜が大好きだった仁明天皇が、藤原良房の家に桜を見に行こうとしながら、急に亡くなったため、良房が翌年の桜の満開のもとに法会を営んだといひます。これは奈良時代に東大寺で行われていた櫻會、正しくは法花會を受け継いだものでした。その後、有名な醍醐寺の櫻會をはじめ、さまざまな櫻會が執り行われるようになりました。

**花見(はなみ)** 「見渡せば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」(素性法師)と詠まれた平安京は、街路樹として柳と桜を交ぜ植えられ、染殿、雲林院、白川など、遠くは吉野の山桜、奈良の八重桜と、桜の名所で花見が盛んにおこなわれました。平安時代には「花の宴」といえば桜の花見のことで、『源氏物語』にも出てきます。

**桜狩(さくらがり)** 鷹狩のついでに山野の桜を賞翫するのが始まりですが、狩り抜きで遠くの山の桜を愛でながら、一二泊するようになりました。新古今集藤原俊成の歌に「またや見むかた野のみの桜狩花の雪散る春の曙」とあるように、現在の大阪府交野が桜狩の名所として有名でした。

花合(はなあわせ) 歌合、絵合などに倣って、桜の花枝を折ってもちより、泉に挿して、賞翫しながら、優劣を定め、歌を詠んだりする行事です。古くは堀河天皇の承德二年三月三日におこなわれた記録が、『長秋記』にあります。これは鎌倉時代にもおこなわれていたことが『古今著聞集』に記されています。

## ●文藝

### 小説：

梶井基次郎「櫻の樹の下には」

櫻の樹の下には屍体が埋まつてゐる！

これは信じていいことなんだよ。何故つて、櫻の花があんなにも見事に咲くなんて信じられないことぢやないか。……

坂口安吾「桜の森の満開の下」

……大昔は桜の花の下は怖いと思つても、絶景だなどとは誰も思いませんでした。

……桜の花の下から人間を取り去ると怖ろしい景色になります……

チャーホフ『桜の園』

この作品では、借財の抵当になっていた領地「桜の園」が競売に付せられ、桜の木が切り倒されていきます。それは、農奴解放にともなう地主階級の没落、新しい階級の擡頭を、桜が切り倒される斧の音で象徴しています。

### 随筆：

清少納言『枕草子』の内、「木の花は」

梅の濃くも薄くも紅梅。櫻の花びらおほきに葉色こきが枝ほそくして咲きたる。……

吉田兼好『徒然草』

家にありたき木は、松、桜、松は五葉もよし、花はひとへなるよし。八重桜は奈良の都にのみありけるを、この頃ぞ、世に多くなり侍るなる。吉野の花、左近の桜、みな一重にこそあれ。八重桜はことやうのものなり。

幸田文『木』の内、「花とやなぎ」

先年、山梨県北巨摩郡の神代桜という、天然記念物に指定されている老木の花を見た。……

見るからに古さのわかる巨木で、根もとはなんといったらいいか、これが桜の木かと疑うばかりの、奇妙な姿をしていた。岩石のかたまりのような恰好であり、色であり、瘤とも見える膨らみがからみあい、荒々しく、おどろおどろとしている。花は形も上品、色も上品、花のつきかたもひと風情あってやさしいのに、ひとたび目を根元にうつすと、驚かないわけにはいかない。花は今年咲きいでた若いのち、根は長い年代を経てきた古いのち、ちよつとショッキングな対比である。

青木玉『こぼれ種』

向島という花どころで育った母は、三囲、白髪、言問橋、人がわざわざお花見をしに来る土地に住んで、蕾のうちから満開になりやがて花吹雪まで、二十年の花を眺めてきた。向島から引越して六十年、それまで遮二無二働き続け、燭やと多少の楽しみを持つゆとりができて、花から遠退いた時を取り戻そうとすることをお花見をしはじめた。

#### 和歌：

山峡に 咲ける桜を ただひと目 君に見せてば 何をか思はむ 大伴家持  
春雨の 花の枝より 流れこぼ 猶こそぬれめ 香もやうつると 藤原敏行  
またや見ん 交野のみ野の 桜狩り 花の雪散る 春のあけぼの 藤原俊成  
山風の 桜ふきまき 散る花の 乱れを見ゆる 滋賀の浦浪 源実朝  
うらうらと のどけき春の 心より にほひ出でたる 山櫻花 賀茂真淵  
しきしまの 大和心を 人とはば 朝日ににほふ 山櫻ばな 本居宣長  
あめつちの 恋は御歌に かたどられ 全かるべく 桜花咲く 与謝野晶子  
顔と顔 よせて行灯の 絵を見るや 桜ににほふ うすあかり哉 木下利玄  
庭土に 桜の蕊(しべ)の はららなり 日なかさびしき あらしのとよみ 釈迺空

#### 俳句：

みよし野のちか道寒し山桜 蕪村  
夜桜や大雪洞の空うつり 子規  
日と空といづれか溶くる八重桜 水巴  
夕桜あの家この家に琴鳴りて 草田男  
天辺に水あるごときさくらかな 麦草  
葉桜の下帰り来て魚に塩 綾子

#### 戯曲：

浄瑠璃『義経千本桜』

源平合戦後、都落ちした義経と密かに生き延びていた平家の武将たちの運命を描いた歌舞伎・人形浄瑠璃の名作ですが、桜の場面は出てこない。義経と奥州合戦の戦没者の慰霊のために源頼朝が建立した鎌倉永福寺は桜の名所で、武士と桜花との結合の古い例とされています。

#### ●音楽

催馬楽の呂の歌に「櫻人」と名づけられた曲があり、古来、花見の宴には奏せられるのが恒例になっていたとのことで、『古今著聞集』にも記録されています。

長唄の名曲を集めた『松の葉』のなかには、「櫻づくし」という曲があつて、そのなかには、楊貴妃、いせ、こまち、波桜、塩がまさくら……などと桜の品種を多数歌い込んであります。

小唄には、『隆達小唄集』に「咲く花も千よ九重八重桜、何ぞ我身のひとはな心」、『松の葉』に「花は桜よ、薫は梅よ、はつ音床しき山ほととぎす」「梅の香を桜ばなに宿らせて、青葉のま



まに眺めばや」、『山家鳥虫歌』に「東山のは雪ではないか、あれが雪かや桜花」「咲いた桜になぜ駒つなぐ 駒がいさめば花が散る」などいろいろあります。

謡曲では、「墨染桜」が有名です。この謡いでは、上野岑雄が「この春ばかり 墨染に咲け」と詠んだのに対し、桜の精が現れて「この春よりは」と直すように頼み、舞をまいます。また「志賀」は、桜をたずねて廷臣が志賀の山に行き、薪に桜の枝を添えた樵に出会うという曲、「鞍馬天狗」では、鞍馬の花見のことから牛若丸の故事が語られます。

## ●美術

サクラを描いた絵画は数多くありますが、なかでも『石山縁起絵巻』の巻一「龍穴」の辺に、見事な桜が描かれています。群青の池のまわりに緑青の丘が重なりあっていて、さまざまな桜が描かれています。絵巻物の桜としては出色のものといえます。

また、近世では、神奈川県小机の泉谷寺本堂にある杉戸絵「山桜」が有名です。これは、安藤広重が天保九年頃描いたといわれるもので、広重最高傑作の一つといわれています。



石山寺縁起絵巻 龍穴の部分



杉戸絵 山桜